

# 院内各部門の現況

## 小児科の現況

小児科, 副院長 滝本 昌俊

### 1) 沿革

名寄市立総合病院小児科は、昭和42年刊行の「名寄市立総合病院三十年史」によると、昭和29年11月1日に中出幸雄先生が名寄町立社会病院に赴任されたのが始まりとされる。その後、曾我部仁志先生、藤田正文先生が後継として診療にあたられたという。昭和31年市制施行とともに名寄町立社会病院は名寄市立総合病院と改称された。

昭和32年12月1日、高橋庸二先生が赴任。高橋先生は以後平成4年6月まで、35年の長きに亘って道北の小児科の孤塁を堅実に守ってこられた。その御労苦に対し改めて敬意の念を表し、感謝の気持ちを捧げた。

昭和49年に設立された旭川医科大学は昭和54年に最初の卒業生を輩出。昭和57年からは、小児科の医局からも卒業生が当小児科の医員として診療に参加活躍するようになった。

田崎卓見、室野晃一、長谷川浩、清水重男、伊藤淳一、田中充、伊藤善也、石岡透、境野環樹、柳川淳一、吉河道人、成田奈津子の諸先生である。

平成4年2月には新病院の建物が完成。同6月15日から新病院で診療開始。残念ながらそれと時を同じくして高橋先生が退職された。ちなみに、平成3年4月1日の小児科の陣容は、高橋副院長、滝本医長、西條医員、石井医員の4名である。その後石井医員は小久保医員と交代、その後小久保医員も山本医員に交代、現在は、滝本副院長、西條小児科医長、山本医員の構成となっている。

### 2) 現況

現在の診療体制をみると外来は滝本、西條が一般外来を担当、特殊外来として旭川医大から感染症担当藤田助教授、血液腫瘍担当岡敏明講師、心疾患担当岡隆治講師と境野先生、神経疾患担当沖医局長と宮本先生、免疫アレルギー担当東先生、内分泌担当伊藤(善)

先生となっている。1日の平均外来数は110~130名である。

入院の方は、西條、山本が担当。平成4年の入院患者数は590名(1日平均11.3名)。疾患の内訳は、肺炎、気管支炎、喘息などの呼吸器疾患が多く約4割、次いで下痢などの消化器疾患が約2割となっている。道北の気候が寒冷であることを反映した疾病構成である。このところ西條医長は、大学時代からウイルス学専攻である長所を発展させ、呼吸器感染のうちRSウイルスのはたす役割を疫学的観点から調べた。その成果が各種学会への発表、雑誌での論文発表となって現れている。

地道な活動であるが、高橋庸二先生は、乳児・幼児の健診、学校児童の検診、予防接種など地域の子供達のための保健予防活動を長い間に亘って続けられた。この仕事は滝本が主に引継いでいる。

### 3) 今後の課題

当院小児科の外来通院の範囲は、上川北部、宗谷南部、北空知の一部で、最も遠い所は、車で2時間程の距離である。病状がある程度進行してから受診する場合も多く、早く診て速い手当てをするという小児急性疾患診療上の鉄則を適確に実行することが求められる。第一線病院の小児科としての充実が第一の課題である。旭川医大小児科の新人医師の臨床教育の現場としても、このような状況が自ら格好の教育環境となっている。日本小児科学会認定医研修施設としてもその充実が期待されている。

現在小児科関連の勉強会としては、月に1回の市別市立病院小児科との合同抄読会があるが、さらに実際の臨床例についての症例検討会を行うこと、頻発する感染症の疫学的、あるいは微生物学的なフィールドワークを合同で行なうことなどが現在の具体的な課題である。